

ルドルフ・シュタイナーのキリスト教論

野口孝之

ルドルフ・シュタイナー (Rudolf Steiner 一八六一—一九二五) は、ドイツにおいて「人智学」(Anthroposophie) と称する思想および社会運動を提唱した思想家である。彼が社会的実践としての人智学を起したのは主に晩年(一九一三年から)であり、それ以前には、彼は神智学協会ドイツ支部の事務総長として神秘的宇宙観・人間観についての講演を行っていた。本発表では、彼が神智学協会と関わっていた時期(一九〇〇—一九一三)に、彼のキリスト教についての言及がいかに変化していったのかを追う。この試みによって、他の神智学者の著作に影響を受けながら構築されたシュタイナーのキリスト教解釈およびイエス論が、アニー・ベザント (Annie Besant) の「東洋的」神智学と距離をとるために意義を変えていったことを明らかにしたい。

一九〇〇年以前のシュタイナーは、宗教や信仰に対して消極的立場に立っていた。彼にとつての「啓示宗教」は、外部から押し付けられた教義を盲目的に受け入れることを意味した。人間は自らの力で原因を追究してから諸事実を受け入れなければならないとされた。

宗教に関する言及が増加したのは一九〇〇年以降である。シュタイナーは一九〇〇年頃から神智学協会の会員の前で宗教に関する講演を行い、その講演の内容を基にして一九〇一年に

『神秘主義』、一九〇二年に『神秘的事実としてのキリスト教』という著作を出版した。前者の著作では、新プラトン主義とドイツ神秘主義が自己認識の方法という伝統として系譜づけられており、宗教的テーマを扱っていないながらも内容は認識論的哲学に終始している。後者の著作において彼は、ギリシア、インド、エジプトに共通する古代の密儀の存在を主張し、その密儀の参入者としてゾロアスター、仏陀、ナザレのイエスを並列化した。それでも彼は、秘密の叡智を公共に開示した宗教としてキリスト教を評価する。しかし、公共化は叡智の通俗化も意味するため、この時点ではキリスト教が他の宗教に対して特別に神聖視されているわけではない。

シュタイナーは一九〇二年に神智学協会へと入会し、ドイツ支部の事務総長に選出され、神秘的世界観・人間観を構築し始める。それに従ってキリスト教やイエスについての講演も行われたのであるが、基本的には秘儀参入者としてのイエスという視点が維持される。この視点は、アニー・ベザントやフランスの神智学者エドゥアル・シュレー (Edouard Schuré) の宗教観を受容したものである。一九〇四年にシュタイナーは神智学協会の主流の思想が仏教的であるのに対して、自らの課題がその神智学の中でキリスト教を意義づけることであると自覚していた。とはいえ、イエスの十字架刑による死と復活は、公衆に霊的な輪廻の存在を知らせるための出来事であり、人類の救済というような観念は見られない。つまり、イエスはあくまでも秘儀参入者としての人間と見なされていたのである。

シュタイナーのキリスト教観・イエス観が変化したのは一九

○六年からである。この時期からキリスト教は諸宗教を束ねる宗教として見なされるようになり、次第に秘儀参入者イエスが神の活動としてのキリストへと移行してゆくことになる。さらに一九一〇年頃からは、「ゴルゴダの秘儀」(「イエスの十字架刑」)が歴史的・霊的中心点として重要視され、キリストが様々な相克やカルマを克服・救済する存在として、他の宗教創始者から差別化されることになる。このような言説の変化は、ベザントの「東洋的」神智学から距離をとり、キリスト教的神智学を再構築する意図をもっていた。この変化の結実がシュタイナーの「人智学」へと至るのである。シュタイナーのキリスト(教)観は、彼の思想の変遷を読み解く上で重要な意義を担っていたのである。

ブーバーにおける「原離隔」について

田 島 卓

マルティン・ブーバーは一九五〇年の著作『原離隔とかかわり』で「原離隔」という概念を導入している。彼はさらに一九六一年の『哲学的弁明から』で、原離隔について、我―汝および我―其れの二重性の基礎づけが関心だったと補足して語っている。また、この補足的テクストのなかでは、原離隔の存在論的性格が強調されており、それが認識論的な反省の次元に根を持つものではないことが示されている。

にもかかわらず、一般に原離隔は認識論的な場所における態

度決定に関するものと解されることが多いように思われる。すなわち、或る主体が「他者を他者としてみとめ、他者を自己から押し離す動き」、あるいは、「他者の他性を受容する備え」というように、道徳的なニュアンスを帯びた認識論的な態度の問題として解されている。だが、この理解には、ブーバー自身の述懐に抵触するだけでなく、いくつかの困難が孕まれている。原離隔が認識論的態度と解されるなら、一方では、原離隔は我―其れの基礎としては機能しえないからであり、他方では、認識論的態度が保持されることで、結局、主観―客観―構造が保存されてしまい、汝と其れを分ける本質的区別が消失してしまうからである。

ところで原離隔が認識論的態度として解されてしまう主たる理由は、おそらく二つある。ひとつは『我と汝』における「生得の汝」の文脈にある「はじめにかかわりがある」という良く知られたテーゼと、かわりの前提としての原離隔という『原離隔とかかわり』の問題設定が撞着しているかに見えるからである。もうひとつには、原離隔という隔ての原理を、我―汝／我―其れの両根源語に先行させることで、結局我―其れを助長することになりはしないか、という懸念である。

これらに対し、原離隔がブーバー自身の述懐にあるとおり、我―汝および我―其れという根源語の基礎として考えられることをしめすことが本発表の主題である。

本発表では、『原離隔とかかわり』を主たる対象として、まずブーバー自身による原離隔の定義とはたらきを確認し、それが認識論的ではなく、存在論的に解されうることを示す。